

香港・台湾の新潮流

# 「中華」からの離脱始まる

## 連帯とアイデンティティ求め

中嶋 嶺雄



北九州市立大  
大学院教授  
(国際社会学)

この春以来の一連のSARS  
禍、中国の新しい指導体制、そ  
して北朝鮮をめぐる様々な国際  
関係などにアジアのニュースの  
焦点が集まるなかで、同じアジ  
アには歴史の深部の潮流に根差  
す大きな変化のうねりが起こり  
つつある。それは、東アジア世  
界が従来の国家的・権力的統治  
の枠組みとは異なった次元で、  
新しい時代のアイデンティティ  
ーを模索しつつ、広く民衆レ  
ベルで胎動しはじめている動きで  
ある。

その第一は、香港での国家保  
安立法の案件が香港市民の抵抗  
で延期されたこと、二つは香港  
人と台湾人が初めて連帯して同  
じ席に着き、「一国両制」下の  
香港と台湾の将来を熱烈に論じ  
はじめたこと、そして三つ目は  
中華世界を離脱して名実ともに  
台湾になるための運動(「正名  
運動」)が本格的に始まったこ  
とである。

運動(一)が本格的に始まったこ  
とである。

### ■天安門以来の抗議デモ

一九九七年の香港返還(香港  
回歸)によって制定された香港  
基本法は、その第三条におい  
て政權転覆や国家分裂の企図を  
禁ずる条例を定めることを前提

にしていた。これは香港におけ  
る政治的自由や言論・出版活動  
の自由を剥奪するに等しいのだ  
が、董建華行政長官は、中国  
当局の意を受けて昨年九月に条  
例草案を発表、本年二月には立  
法会(議会)に提案、この七月  
初旬の制定を目指していた。

これにたいして香港市民や民  
主派の立法会議員らが強く反  
発、温家宝・中国首相を迎え  
て香港返還六周年の式典が行わ  
れた七月一日には六十万人もが  
抗議デモに立ち上がったのであ  
る。香港ではかつて中国の天安  
門事件(一九八九年六月)の直  
後に「今日の北京は明日の香  
港」と危機感を抱いた市民百万  
人以上がデモに結集したことが  
あったが、返還後の中華人民共  
和国特別行政区となった香港で  
これほど多くの市民が政治的な  
意思を表示したのは、画期的な  
ことであった。

しかも民主倒重力量(Anti-  
Tung Solidarity)一をス  
ローガンに今回のデモを積極的

に組織した急進的民主党派「前  
線」の劉慧卿女史(立法議  
員)ら二十名の香港代表は、去  
る八月十六、十七の両日、  
李登輝・前台湾総統自ら討議に  
加わった「一国両制下の香港」  
と題する国際討論会に出席し、  
七百名に近い台湾の人士と熱烈  
な討論を重ねたのである。この  
時期に政治的前途を賭けてあえ  
て台湾に行くという厳しい決断  
を経てのことであった。

このような経緯のうちに香港  
の董建華行政長官は去る九月五  
日、国家保安条例の立法化を白  
紙撤回すると発表した。今回の  
一連の動きは、香港の将来のみ  
ならず、中華世界の将来にとっ  
てもきわめて意味の大きいもの  
だといえよう。

こうした香港の成功に刺激さ  
れるかたちで、翌九月六日に  
は、李登輝氏自ら先頭に立った  
台湾の「正名運動」のデモに十  
五万人もが結集した。どこから  
見ても現実には主権独立国家で  
ある台湾は、自らの発意でいよ  
いよ中華民国という仮面を捨  
て、台湾という実像をつかもう  
としている。そのためにも中国  
人ではなく台湾人だというアイ  
デンティティ(国家認同)が  
必要だという市民意識の変化  
は、どんな政治的・軍事的な強  
制によっても覆すことのできな  
い歴史の流れである。

このような東アジア世界の基  
底の新しい潮流をしつかり見据  
えてゆこうと、差し迫つての  
重要課題だといえよう。

私がこゝで具体的に示すの  
は、いずれもこの夏以来の出来  
事であり、東アジア世界の将来  
に大きな影響を、時がたつにつ  
れてじわじわと社会の内側から  
もたらすものと思われる。

7月1日の香港の国家保安立法  
反対デモ。主催者によると、参  
加者は50万人を超えた。董建華  
行政長官の辞職を求める文字も  
見える=AP

